



保育者養育スキル尺度の作成

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育文化学部附属教育実践総合センター 公開日: 2011-08-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡本, 憲和, 立元, 真, Okamoto, Norikazu メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/3481

保育者養育スキル尺度の作成

岡本 憲和¹・立元 真²

Development of Preschool Teacher's Nurturing Skills Scale

Norikazu OKAMOTO・Shin TATSUMOTO

幼稚園教諭,あるいは保育所の保育士などの保育の専門職従事者が心身ともに健康であり,かつ,適切な技術をもって職務にあたることは,高いレベルをもつ国民性を重要な資源とする(Shwalb, Shwalb, Sukemune, Tatsumoto, 1992)わが国にとって,その将来を左右する重要な問題である。保育者を測定の対象とした研究は,古くは,石川・嘉数・喜友名(1983)がストレス尺度を作成し,喜友名・石川・嘉数(1983)を含めた一連の研究が,ストレスに關与する要因を検討している。また,昨今では,西坂(2002)が,幼稚園教諭のストレス状況に対してハーディネスと保育者効力感が抑制的な効果を持つことを示している。他方で,西山(2006)は,保育者のメンタルヘルスだけでなく,保育の特定の領域における能力感の測定という新しい方向性を見出し,人間関係領域の保育者効力感尺度の作成を試みている。さらに,(岡本,2004)は,行動論に基づいた保育者の技術改善を意図して,保育者養育スキル尺度の作成を試みている。

近年の「行為の問題」を持つ子どもを扱った研究によれば,2歳以上の子どもを持つ家庭において,個別家族ベース,集団ベース,自己実施などのさまざまな形態とレベルのペアレントトレーニング介入が,養育行動の改善と子どもの「行為の問題」の減少効果を持つこと(Sanders, Markie-Dadds, Tully, & Bor, 2000)が示されるようになってきた。

このようなペアレントトレーニングの技法は,国内では,肥前療養所の肥前方式親訓練(HPST; 山上,1998)を皮切りに,発達障害をもつ子どもを持つ親に対する集団的介入あるいは個別的介入のプログラムとして,国内でも広がりを見せている。

ペアレントトレーニングは,発達障害や「行為の問題」をもつ子どもへの療育支援や治療的介入として行われるだけではなく,昨今では,就学前の子どもや小学校低学年の子どもを持つ親を対象として,子育て支援的な予防介入プログラムとしての広がりも見せている(立元,2005)。わが国で子育て支援的な予防的介入プログラムが拡充していくためには,わが国の保育・教育システムの中に,介入プログラムをうまく組み込んでいく必要がある。Taylorと

¹ 早稲田内科神経科医院

² 宮崎大学教育文化学部

Biglan (1998) は、彼らのペアレントトレーニング研究の中で、子どもの「行為の問題」の改善が家庭から学校に般化する効果が得られない場合は、教師が介入自体に何らかかかわっていなかった場合であることを示唆している。また、Webster-Stratton & Reid (1999) は、Incredible Years Parents and Teacher Seriesプログラムを行為障害の診断を受けた4～8歳の子どもに対して行った。その結果、行動理論に基づいた教師トレーニングは、親と子どものトレーニングの有効性を有意に高めることを示した。さらに、立元・児玉・井上・吉川(2006)は、保育者が行動理論に基づいたスキル研修を行うことにより、予防介入の効果がみられたことを示している。保育者や教師は、子どもの発達や発達支援のスペシャリストであり、かつ、子どもの保護者と協同する最も身近な存在である。保育者や教師が、ペアレントトレーニングで用いられる適切な介入スキルを身につけて子どもに関わり、さらに親に対するトレーナーとしての機能を果たすことができるようになれば、子育て支援的な予防介入の効果を確実に高め広めていくことに繋がると考えられる。立元・児玉・井上・吉川(2006)においては、保育者のスキル研修の効果を岡本(2004)が作成した保育者スキル尺度を用いて効果を測定した。この尺度は、保育者自身の自己評価において変化が生じにくいネガティブなスキルである「ネガティブな罰スキル」の項目が3つしかなく、そのため、床効果が生じやすく介入の効果の感度が鈍いという問題点がある。

そこで、本研究は、岡本(2004)の保育者スキル尺度を再吟味し、幼稚園教諭や保育士の保育上の行動の尺度を新たに構成し、信頼性等の検討を行うことを目的とする。

また、三木・桜井(1998)は、効力感とは子どもに対する援助能力を高める重要な要因であると述べている。さらに、ペアレントトレーニングのための基礎研究は、就学前の子どもを持つ母親の養育スキルのうちポジティブなスキルが、母親のいくらかのストレス反応との間に負の相関を持ち、ネガティブな養育スキルは正の相関を持つことが明らかにされている(坂田・立元・佐藤・岡安・佐藤, 2001; 立元, 2005)。保育者スキルと保育者効力感やストレス反応との間の関係を検討することにより、本研究で新たに作成する保育者のスキル尺度の妥当性の一部を証明することが、本研究の副次的な目的である。

【方法】

<調査対象>

調査対象者は、宮崎県M市・市群地域、N市内の私立幼稚園・保育園で職員として勤務している保育者(277名)であった。調査園の総数は38園で、その内わけは幼稚園26園、保育園12園であった。記入もれがあったものを除き、265名(幼稚園教諭137名、保育士128名)を分析対象とした。調査対象となった保育者の年齢構成は、20代が140名、30代が54名、40代が50名、50代以上が21名であった。また3～5歳の子どもを担任した経験の有無については、担任を待ったことがある保育者は225名、持ったことのない保育者が40名であった。

<調査材料>

保育者養育スキル尺度の材料

幼児の母親の養育スキル尺度(立元ら, 2001)や幼児版養育スキル尺度Ver.2(立元, 2005)によって用いられた母親の養育スキルのカテゴリーおよび、親トレーニングプログラム(立元, 2005)や、保育者研修プログラム(立元, 児玉, 井上, 吉川, 2006)の教示内容に基づき、保

育場面における保育者の具体的な保育行動のリストを作成した。また、保育者の具体的な行動リストを作成するには内容の妥当性を検討するために、幼児心理学領域の研究者1名、教育心理学領域の研究者1名、臨床心理学領域の研究者1名、および、現役の保育者1名が、各項目が保育者の保育スキルを表現しているか否かについての検討を行った。その結果、合計45項目が得られた。

保育者効力感尺度(三木・桜井, 1998)この尺度は、保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育行為をとることができる信念である保育者効力感を測定する1因子10項目($.83 < \alpha < .85$)からなる尺度である。この尺度は、保育専攻の学生を対象とした調査をもとに標準化されている。また、項目内容は、「…できると思う」という、ポジティブな効力感を問う質問項目を中心に構成されている。現役の保育者による、日々の実践や成果を根拠とした効力感というよりも、まだ経験の少ない保育専攻学生の根拠の薄い効力感予期を測定する傾向が高いと判断される。

ストレス反応尺度(新名・坂田・弥富・本間, 1990)この尺度は、情動反応として抑うつ、不安、不機嫌、怒りの4因子、また認知・行動的反応として自信喪失、不信、絶望、心配、思考力低下、非現実的願望、無気力、引きこもり、焦燥の9因子、計13因子(計53項目)で構成されている。ストレス事態に接することによって、対象者に及ぼす心的な反応の程度を測定するものであり、標準化そのものは大学生のデータに基づいてなされているが、幅広く用いられているものである。

【結果と考察】

<保育スキル尺度の作成>

保育スキル45項目について、重み付けのない最小二乗法、プロマックス回転による因子分析を行い、因子負荷量.30以上を基準として4因子を抽出した。得られた因子とそれに含まれる項目数、および各因子の寄与率、 α 係数をまとめたものをTable 1に示す。

第1因子は、「あなたが指示したことを子どもがしている時は、その行動をしている間ほめるようにしている」、「子どもが望ましい行動をしていると気がついたらすぐにはめる」、「あなたは子どもが望ましくない行動をするのをやめたら、すぐにそのことをほめる」など、子どもの賞賛や望ましい行動を教えるための援助行動を示す9つの質問項目群を抽出した。そこで、第1因子は『援助・賞賛スキル』と命名した。

第2因子は、「保育園、もしくは幼稚園で子どもが持っている問題や、心配事に気づくことができる」、「保護者に家庭で決まりごとを設けることを勧めている」、「自由遊びの時間に遊びのグループに入れないうちを子どもをチェックしている」などの7つの質問項目群を抽出し、子どもについての情報の獲得の技術や子どもや保護者への情報発信などのスキルから構成されていることから『情報発信・獲得スキル』と命名した。

第3因子は、「子どもをしつける時、叩いてしつける」、「子どもが間違っただけをしたときは、大声でどなりちらす」や、逆転項目としての「子どもが何か失敗したときには、励ましてあげる」、「子どもの行動が失敗に終わっても、努力したことをほめてあげる」などの7つの質問項目群を抽出した。子どもの望ましい行動をほめず、さまざまな形の罰を用いて子どもの行動を制御する行動が列挙されたことから、第3因子は「罰スキル」と命名した。

第4因子は、「子どもにいうことを聞かせることは必要だと感じているが、それが大変だと

きには、つい、したようにさせてしまう」、「はじめは「いけない」といっても、子どもに粘られると最後には許してしまう」、「子どもにかまってやる時間がないときには、とりあえず何かを約束したり、ご褒美をあげたりして満足させる」などの7つの質問項目群を抽出した。ここでの項目群は、子どもへのかかわりの方針が一貫しない気まぐれや場当たりの保育行動が示されていたために、第4因子は、「非一貫性・子ども主導スキル」と命名した。

上記のように、268名の保育者の保育上の行動に基づき作成した尺度を、保育者養育スキル尺度Ver.2と称することとした。

内的一貫性の検討

上記で抽出した4つの因子について求めた Cronbachの α 係数は、『援助・賞賛スキル』においては内的一貫性を示す十分な値を示していたが($\alpha = .723$)、『情報スキル』、『罰スキル』、『非一貫性・子ども主導スキル』については、やや低めの値(.641 < α < .676)が算出された。

Table 1 保育スキルアンケートの因子分析の結果 (N=265)

因子1 (援助・賞賛スキル) 9 因子 因子寄与率=9.956 $\alpha = .7232$	因子負荷量			
	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4
子どもが何かに挑戦しようとしているときは、その努力を認め見守るようにしている	0.365	0.107	-0.215	-0.059
子どもが難しい場面や、課題に直面しているときは、ヒントを与えるようにしている	0.377	0.089	-0.183	0.081
子どもが難しい場面や課題に直面しているときは、身振り手振りで手本を示すようにしている	0.424	0.030	0.160	0.074
子どもが困っているときには良い解決策を探してあげる	0.444	-0.072	-0.192	0.004
指示したことにすぐ従えない子どもには、あらかじめ指示するなどの工夫をしている	0.454	0.098	0.027	0.116
子どもに教えたことがすぐできないと注意したり再度指示したりする	0.473	-0.199	0.069	0.213
あなたは子どもが望ましくない行動をするのをやめたら、すぐにそのことをほめる	0.535	0.057	0.054	0.010
子どもが望ましい行動をしていると気がついたらすぐにほめる	0.580	0.012	0.062	-0.054
あなたが指示したことを子どもがしている時は、その行動をしている間ほめるようにしている	0.681	-0.147	0.018	0.019
因子2 (情報発信・獲得スキル) 9 因子 因子寄与率=6.882 $\alpha = .6671$				
子どもが間違った行動をしたときには、子どもと話し合い、理由を聞いたりする	0.090	0.301	-0.267	0.057
自分のクラスだけの決まり事がある	0.115	0.355	0.078	-0.033
子どもの困った行動について職員同士で話し合いをする	0.114	0.358	0.070	-0.095

子ども達同士のいざごは、始めは自分達で問題を解決できるかどうか判断するために静観し、解決しないときにはいっしょに原因と解決策を考える	0.122	0.381	-0.246	-0.066
指示したことをすぐ従えない子どもをチェックしている	0.267	0.394	0.271	0.081
先生の注意を引きたいために、子どもが望ましくない行動をしているのが分かる	-0.109	0.400	-0.099	0.083
自由遊びの時間に遊びのグループに入れれない子どもをチェックしている	0.024	0.497	0.020	-0.066
保護者に家庭で決まりごとを設けることを勧めている	-0.112	0.523	0.032	-0.014
保育園、もしくは幼稚園で子どもが持っている問題や、心配事に気づくことができる	-0.170	0.631	-0.074	0.033

因子3 (罰スキル) 7 因子

因子寄与率=3.496 $\alpha = .6417$

子どもが何か失敗したときには、励ましてあげる	0.181	0.071	-0.437	0.057
子どもの行動が失敗に終わっても、努力したことをほめてあげる	0.146	0.091	-0.382	0.183
子どもに理由を説明するより、罰を与える方法でしつけている	-0.037	0.102	0.428	0.089
子どもが間違った行動をしたときは、大声でどなりちらす	0.059	0.044	0.437	0.099
あなたはその時の気分次第で子どもに罰を与える	-0.109	0.147	0.438	0.125
子どもが悪いことをしたら叩く	0.225	-0.082	0.500	-0.080
子どもをしつける時、叩いてしつける	0.167	-0.011	0.619	-0.210

因子4 (非一貫性・子ども主導スキル) 7 因子

因子寄与率=2.897 $\alpha = .6768$

子どもに望ましい行動をして欲しいときは、「～したら、～してもいいよ」などとご褒美を与えるようにしている(例:お片付けができれば、お外で遊んでいいよ)	0.213	0.011	0.013	0.332
子どもとのいざごさが面倒なときには、子どもの好きなようにさせてあげる	-0.053	-0.126	0.113	0.395
子どもがあなたの注意を引こうと泣きわめいているとわかっているが仕方なく子どものそばに行ってなくさめる	-0.006	0.261	0.000	0.435
子どもが指示に従わないときは、子どものやりたいようにさせる	0.014	-0.069	0.001	0.463
子どもにかまってやる時間がないときには、とりあえず何かを約束したり、ご褒美をあげたりして満足させる	0.132	-0.030	-0.075	0.477
はじめは「いけない」といっても、子どもに粘られると最後には許してしまう	0.017	-0.085	-0.166	0.611
子どもにいうことを聞かせることは必要だと感じているが、それが大変なときには、つい、したいようにさせてしまう	-0.041	-0.116	0.018	0.691

因子間相関

抽出した因子の、論理的妥当性を検討するために、因子間の相関を算出し検討した。この結果、「援助・賞賛スキル」と「情報獲得スキル」の間に有意な相関がみられた ($r=.27$, $p<.01$)。「援助・賞賛スキル」と「情報獲得スキル」の因子は、その項目内容から、いずれも保育者としてポジティブなスキルであると考えられ、類似した項目から構成される、立元(2005)の、幼児期の子どもを持つ母親用に標準化した養育スキル尺度中の「好ましい働きかけスキル」は、子どもが適切な行動を学習し定着させていくための具体的なスキルと言う点で、本研究で作成した保育者養育スキル尺度Ver.2の「援助・賞賛スキル」と共通した内容を多く含み、行動理論に即して子どもの望ましい行動を高めていくポジティブな項目から構成されている。また、本研究で作成した保育者養育スキル尺度Ver.2の「情報獲得スキル」は、立元(2005)の幼児版母親用養育スキル尺度中の「関心」スキルと共通した項目と、新たに付け加えた、子どもや保護者や同僚に対して保育上の適切な情報を安定的に提供する内容を示す項目から構成されており、理論的にもポジティブなスキルであると考えられる。したがって、ここでの相関関係はポジティブなスキルとしての共通性が示されたものと考えられ、論理的に妥当な関係性が示されたものと考えられる。

また、「罰スキル」と「非一貫性・子ども主導スキル」の間にも有意な正の相関が示された ($r=.24$, $p<.01$)。「罰スキル」は、攻撃性や威嚇をもって他者の行動をコントロールする内容の項目および逆転項目としての、子どもの行動発達上のつまずきを励まして支える項目から構成されている。罰を用いて子どもの行動を制御しようとする行動傾向は、一時的には即効性の効果を持つようにみられることもあるが、長い目で見ると幼児にとって身近な大人であるところの保育者が、攻撃性や威嚇をもって他者の行動をコントロールする行動パターンの手本を示すことになり、保育者の行動傾向としては適切ではないものと考えられる。また、子どもの行動発達のためには、励ましや援助などのプロンプトを通して、発達の最近接領域と呼ばれる行動を支えることは保育活動の基本である。その意味でも、このものつまずきを支える行動傾向が逆転項目として含まれる「罰スキル」は、保育者としてはネガティブなスキルであると考えられる。

「非一貫性・子ども主導スキル」は、立元ら(2001)の「一貫性のないしつけ」の因子と内容的に重なり、養育方針が一貫しておらず、子どもの意思表出によって容易に対応を変更してしまい、主導権を幼い子どもに委ねてしまう行動を示す項目から構成されている。また、このような養育環境下では、子どもの望ましい行動に対しても不適切な行動に対しても、安定した強化あるいは消去等の対応がなされず、子どもの不適切な行動を高めさらに悪化させてしまう傾向があることが知られている。そのため、「非一貫性・子ども主導スキル」もまた、保育者

Table 2 因子間の相関係数 (n=265)

	援助・賞賛 スキル	情報獲得・発信 スキル	罰スキル	非一貫性・子ども 主導スキル
援助賞賛スキル		.27	.11	.12
情報発信・獲得スキル	P<.001		-.03	-.13
罰スキル	ns	ns		.24
非一貫性・子ども主導スキル	P<.01	P<.01	P<.001	

としてはネガティブなスキルであると考えられる。

「罰スキル」と「非一貫性・子ども主導スキル」は、その項目内容から、いずれも保育者としてネガティブなスキルであると考えられる。したがって、「罰スキル」と「非一貫性・子ども主導スキル」との相関関係はネガティブなスキルとしての共通性が示されたものと考えられ、論理的に妥当な関係性が示されたものと考えられる。

再検査信頼性

また、再検査信頼性の確認するために、93名の保育者について、3週間の期間をはさんで同じ質問紙を用いて2回目の調査を行った。1回目と2回目の各因子の得点の間のPearsonの相関係数を算出した結果をTable 3に示す。その結果、「援助・賞賛スキル」の相関係数は $r = .64$ ($p < .001$)、「情報獲得・発信スキル」の相関係数は $r = .71$ ($p < .001$)、「罰スキル」の相関係数は $r = .81$ ($p < .001$)、「非一貫性・子ども主導スキル」の相関係数は $r = .71$ ($p < .001$)であり、すべての因子において高い正の相関がみられた。この結果は、高い水準の再検査信頼性が認められたと解釈することができる。

Table 3 再検査信頼性 (n=93)

援助・賞賛スキル	情報獲得・発信スキル	罰スキル	非一貫性・子ども主導スキル
$r = .64$	$r = .71$	$r = .81$	$r = .71$
$p < .001$	$p < .001$	$p < .001$	$p < .001$

基準関連妥当性 保育者効力感

三木・桜井(1998)が作成した、保育者効力感尺度(1因子, 10項目)との関連をPearsonの相関係数を算出することにより検討した。この結果、保育者養育スキル尺度Ver.2における情報獲得スキルと保育者効力感尺度との間に正の相関があることが示された($r = .38$, $p < .001$)。保育上、子どもや保護者・同僚に対して適切な情報を提供したり情報を得たりする情報獲得スキルを多用する保育者は、保育者としてうまくやっていくことができるという予期が高いという結果は、論理的に妥当な関係性が示されたといえるだろう。

Table 4 保育者養育スキルと保育者効力感との相関 (n=265)

援助・賞賛スキル	情報獲得・発信スキル	罰スキル	非一貫性・子ども主導スキル
.10	.38	-.11	-.16
ns	$p < .001$	ns	$p < .01$

一方、保育者養育スキル尺度Ver.2における他の因子の得点との有意かつ十分な値を示す相関関係はみられなかった。具体的な保育上の行動項目からなる保育者養育スキル尺度Ver.2と効力感予期ともいえる保育者効力感尺度の間には、実際の保育実践上の行動的側面と保育者自身についての認知的側面の間の乖離が、関係性を明確でないものにしてしまったのかもしれない。少なくとも、論理的に説明ができない方向での相関関係が示されているわけではない。

基準関連妥当性 ストレス反応

3～6歳の幼児をもつ母親の養育スキルとストレス反応との間を検討した研究(坂田・立元・佐藤・岡安・佐藤, 2001)では、ネガティブな養育スキルである「罰」を多用する母親は、「抑うつ」、「不安」、「不機嫌」、「怒り」などの感情的ストレス反応や、「自信喪失」、「不信」、「絶望」、「思考力低下」、「無気力」などの認知・行動的ストレス反応が高いという相関関係が示された。また、「援助的な言葉かけ」や「コミュニケーション」などのポジティブな養育スキルは、それぞれ感情的ストレス反応や、認知・行動的ストレス反応の多くの因子と負の相関関係をもつことが示されている。

また、幼児版養育スキルVer.2(立元, 2005)においても、母親の「罰スキル」は、ほとんどの「感情的ストレス反応」と「認知・行動的ストレス反応」との間に正の相関を示している。さらに、ポジティブな養育スキルである、「好ましい働きかけスキル」は、ほとんどの「感情的ストレス反応」や「認知・行動的ストレス反応」との間に負の相関関係を示している。保育者と保護者という立場の違いはあるが、同じように子どもに密接に関わる機会を持つ存在であるという共通点を考慮すれば、ストレス反応が高い者はネガティブな子どもへのスキルを用いることが多く、逆に、ストレス反応が低い者はポジティブなスキルを用いることが多いことを、論理的に推測することができる。

Table 5 保育者養育スキルと感情的ストレス反応との相関 (n=265)

	抑うつ	不安	不機嫌	怒り
援助・賞賛スキル	r=-.03 ns	r=-.06 ns	r=-.06 ns	r=-.05 ns
情報獲得・発信スキル	r=-.09 ns	r=-.15 p<.05	r=-.12 p<.01	r=-.01 ns
罰スキル	r=.26 p<.001	r=.22 p<.001	r=.33 p<.001	r=.25 p<.001
非一貫性・子ども主導スキル	r=.13 p<.05	r=.10 ns	r=.18 p<.01	r=.06 ns

本研究で作成した、保育者養育スキル尺度Ver.2と、保育者の感情的ストレス反応の得点との間の相関関係をTable 5に示す。この結果、「罰スキル」を用いることが多い保育者は、「抑うつ」(r=.26, p<.001)、「不安」(r=.22, p<.001)、「不機嫌」(r=.33, p<.001)、「怒り」(r=.25, p<.001)などの、感情的ストレス反応のすべての因子において有意な正の相関を示した。これらは、坂田ら(2001)や立元(2005)の結果と一致しており、論理的にも妥当な関係が示されたものと考えられる。一方で、その他のスキルについては、有意な相関関係はみられなかった。ストレス反応尺度は、様々に想定されるストレスに対する反応を特定して測定しているものではない。保育者と母親におけるストレスやそれによって引き起こされるストレス反応の微妙な違いが、これらの関係性の違いを導いているものと考えられる。

保育者の認知・行動的ストレス反応の得点との間の相関関係をTable 6に示す。この結果、「罰スキル」を用いることが多い保育者は、「自信喪失」(r=.26, p<.001)、「不信」(r=.24,

Table 6 保育者養育スキルと認知・行動的ストレス反応との相関 (n=265)

	自信喪失	不信	絶望	心配	思考力低下	非現実的願望	無気力	引きこもり	焦燥
援助・賞賛スキル	r=-.05 ns	r=-.08 ns	r=-.09 ns	r=-.02 ns	r=-.08 ns	r=-.05 ns	r=-.05 ns	r=-.06 ns	r=-.09 ns
情報獲得・発信スキル	r=-.15 p<.05	r=-.01 ns	r=-.13 p<.05	r=-.11 ns	r=-.23 p<.001	r=-.15 p<.05	r=-.13 p<.05	r=-.11 ns	r=-.14 p<.05
罰スキル	r=.26 p<.001	r=.24 p<.001	r=.33 p<.001	r=.19 p<.001	r=.15 0.016	r=.18 p<.001	r=.26 p<.001	r=.23 p<.001	r=.15 p<.05
非一貫性・子ども主導スキル	r=.11 ns	r=.20 p<.01	r=.18 p<.001	r=.10 ns	r=.11 ns	r=.16 p<.001	r=.22 p<.001	r=.23 p<.001	r=.15 p<.05

p<.001), 「絶望」(r=.33, p<.001), 「無気力」(r=.26, p<.001), 「引きこもり」(r=.23, p<.001)などの, 認知・行動的ストレス反応の因子の多くと有意な正の相関関係を持っていることが示された。これらの関係もまた, 感情的ストレス反応における相関関係と類似した結果を示している。

また, 「非一貫性・子ども主導スキル」は, 「不信」(r=.20, p<.01), 「無気力」(r=.22, p<.001), 「引きこもり」(r=.23, p<.001)といった, 認知・行動的ストレス反応の因子と有意に正の相関を示した。ネガティブな保育者養育スキルを多用する保育者はストレス反応が高く, ポジティブなスキルを多用する保育者はストレス反応が低いという結果が示されている。

さらに, この結果は, 立元(2005)における, この因子と類似した内容の項目で構成されている母親の「一貫性のないしつけスキル」とストレス反応との関係とを, 対比させて考えると興味深い。母親においては, 「一貫性のないしつけスキル」と「不機嫌」の「感情的ストレス反応」と正の相関を示すが, 保育者における「一貫性のないしつけスキル」は, 「不信」, 「無気力」, 「引きこもり」といった認知・行動的ストレスと正の相関を示している。母親は, 不機嫌な感情状態になったときに「一貫性のないしつけスキル」というネガティブなスキルを用いる傾向があるが, 保育者は, ストレッサーに対する積極的な対処ができなくなってしまった「無気力」や「引きこもり」の状況にあたり, 周囲が信じられなくなった「不信」の状況にある場合に, このネガティブなスキルを用いる傾向にある。西坂(2002)のデータは, 保育者にとっての重要なストレッサーとして, 「園内の人間関係の問題」のような, 子どもとは直接に関係しない因子によるものであることを示している。このような子どもとは直接に関係しないストレッサーへの対処方略を教授することが, 保育行動の改善に繋がっていくのかもしれない。

さらに, 「情報獲得・発信スキル」が高い保育者は, 「思考力低下」のストレス反応を示すことが少ないという負の相関関係(r=-.23, p<.001)も示された。情報発信や情報獲得のスキルが高い保育者は, そのスキルを生かして, 問題解決を図ることができると思うことができる。そのため, この関係も論理的に妥当な関係性であると思うことができる。

本研究は, 行動論に従った観点からの保育者としてのスキルに関する, 「援助・賞賛スキル」, 「情報発信・獲得スキル」, 「罰スキル」, 「非一貫性・子ども主導スキル」からなる保育者養育スキル尺度Ver.2を作成した。本尺度は, 内的一貫性については若干の不十分さをもつ。これは, 保育者自身による自己評価である点と, その自己評価に対する他者の評価に対する懸念,

尺度構成のもととなった行動論的な項目内容に対する保育者の行動傾向の差異などが複合的に影響しているものではないかと考えられる。他方で、本尺度は、十分な再検査信頼性を示し、また、因子間相関、保育者効力感尺度との関係性の検討、ストレス反応尺度との関係性の検討を通して、その論理的な妥当性の一部を示すことができた。

本研究を含めた一連のプロジェクトは、本尺度によって可能になった、保育者の理論に沿った観点からの行動傾向の測定に基づいて、保育者対象の研修プログラムを実践し、保育行動の改善を通して保育の質の向上を目指すこと。さらに、すでに進行している予防的なペアレントトレーニングプログラム(立元, 2005)と組み合わせて、総合的な保育支援・子育て支援を実現していくことである。

引用文献

- 石川清治 嘉数朝子 喜友名静子 1983 保母の精神衛生に関する諸要因の検討Ⅰ: ストレスと諸要因の相関分析 日本保育学会大会発表論文抄録 36, 364-365.
- 喜友名静子 石川清治 嘉数朝子 1983 保母の精神衛生に関する諸要因の検討Ⅱ: ストレスと諸要因の分析的研究 日本保育学会大会発表論文抄録 36, 366-367.
- 三木知子 桜井茂男 1998 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響 教育心理学研究 46, 203-211.
- 新名理絵 坂田成輝 弥富直美 本間昭 1990 心理的ストレス反応尺度の開発 心身医学 30(1), 29-38.
- 西坂小百合 2002 幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス、ハーディネス、保育者効力感の影響 教育心理学研究 50, 283-290.
- 西山 修 2006 幼児の人とかかわる力を育むための多次元保育者効力感尺度の作成 保育学研究 44 (2) PP.246-256
- 岡本憲和 2004 保育者の保育スキルに関する研究 -保育スキル尺度の作成と、保育者トレーニングの実践- 宮崎大学大学院教育学研究科修士論文(非公刊)
- 坂田和子 立元真 佐藤容子 岡安孝弘 佐藤正二 2001 幼児の母親の養育スキルに関する研究(2) -親の養育スキルと精神的健康との関係-, 日本教育心理学会 (43): 520.
- Sanders M.R. 1999 Triple P-Positive parenting program: Towards an empirically validated multilevel parenting and family support strategy for the prevention of behavior and emotional problems in children. *Clinical Child and Family Psychology Review*. 2(2), 71-90.
- Sanders M.R., Markie-Dadds, Tully, and Bor, 2000 The Triple P-Positive Parenting Program: A Comparison of Enhanced, Standard, and Self-Directed Behavior Family Intervention for Parents of Children With Early Onset Conduct Problems. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*. 68 (4), 624-640.
- 佐藤容子 立元真 坂田和子 岡安孝弘 佐藤正二 2001 幼児の母親の養育スキルに関する研究(3) -親の養育スキルと子どもの社会的スキルとの関係-, 日本教育心理学会 (43): 521.
- Shwalb D., Shwalb, B. Sukemune S., Tatsumoto S. 1992 Japanese Non-Maternal Childcare: Past, Present and Future. *Child Care in Context*. Lawrence Erlbaum Associates. (Hillsdale) 331-353.
- 立元真 2005 幼児の親に対する予防的な養育スキル・愛着関係改善トレーニング介入 平成15~16年度科学研究費補助金(基盤C)研究成果報告書
- 立元真 佐藤容子 坂田和子 岡安孝弘 佐藤正二 2001 幼児の母親の養育スキルに関する研究(1) -養育スキル尺度の作成-, 日本教育心理学会 (43): 519.
- 山上敏子 1998 発達障害児を育てる人のための親訓練プログラム お母さんの学習室 二弊社